九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ジッドの盛澄華宛書簡

吉井, 亮雄
九州大学大学院人文科学研究院 : 教授

https://doi.org/10.15017/1430756

出版情報：Stella. 32, pp.261-292, 2013-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

ジッドの盛澄華宛書簡

吉　井　亮　雄

アジア系として初のアカデミー・フランセーズ会員となったフランソワ・チェン（中国名，程抱一（チョンパオイー）。1929年江西省南昌生まれ，48年渡仏，77年フランスに帰化）の自伝的小説『ティエンイの物語』（1998年刊，フェミナ賞受賞）には，この作家・詩人をはじめ同世代の中国人青年層が多大な影響を受けた西洋文学，とりわけフランス文学について触れた次のような一節がある――

> 今世紀のふたりのフランス人作家が私たちにも中国の若者全体にも決定的な影響を与えようとしていた。ロマン・ロランとジッドである。このふたりが名声を得たのは卓越した翻訳家，傅雷（フーレイ）と盛澄華（ションチョンファ）のおかげで，彼らはいずれもフランスに留学し，両作家と親交を結んでいた。〔…〕ジッドは，帰宅した放蕩息子が弟に心を打ち明けるように，中国人に語りかけてくる。己の可能性を自らの内から汲みあげ，熱情を再発見し，願望の領域を広げ，家族と社会の伝統が作りあげた束縛から抜け出す勇気をもて，そう励ましてくれる。退廃したこの古い国において，理想に燃える中国人のすべてを苦しめていたのがこの束縛なのだ。[1)]

文中特筆されるように，ふたりの中国人翻訳家・研究者，傅雷と盛澄華がフランス現代文学の紹介に果たした功績は大きなものであったが，それだけになおのこと，西洋に学んだ知識人としての名声は彼らの晩年に禍をもたらさざるをえない。ふたたび『ティエンイの物語』の記述によれば――

> わずか4半世紀後，文化大革命において西洋のブルジョワ的傾向にたいする容赦ないキャンペーンが猛威をふるっていたとき，〔ロランの訳者〕傅雷は自分の蔵書や原稿がばら撒かれ火に焼かれるのを目の当たりにすることになる。自宅を押収され，彼とその妻は狭い一室での生活を強いられる。「人民の敵」となり，傅雷は昼も夜も紅衛兵の前にひきずり出され，際限のない尋問と肉体的虐待を科せられる。ついに夫妻は，相手を遺さぬために心中を決意した。〔ジッドの訳者〕盛澄華のほうは強制労働の収容所に送られた。健康状態が思わしくないにもかかわらず，ありとあらゆる労働を強いられた。まずは収容所の建設じたいに駆り出され，次いで課せられた農作業では一日中

水田の泥に足を漬けていなければならず，いきなりさらけ出された還暦〔間近〕の体を害虫の攻撃から守る術はなにひとつとてなかった。ある日，焼けつくような太陽の下，彼は水田の直中でくずおれ，頭が水に没した。一言も発することはなかった。[2)]

盛澄華に話を絞れば，『地の糧』『贋金つかい』などの訳業が中国国内で回顧・称揚される機会はあっても，それを別とすれば彼がジッドとの絡みで具体的な論述の対象となったことは現在に至るまで一度もない。上記のような爾後の歴史的経緯も禍したのか，そもそも両者のあいだに個人的交流があったことじたいがほとんど知られていないのである。筆者自身も 1943 年のジッドの『日記』が盛澄華にかんする記述を残すことは承知していたが，この人物にさほど強い関心を寄せていたわけではない。ただ数年前，ジッド研究の第一人者クロード・マルタンと共著で『ジッド研究書の年代順書誌』の増補改訂をおこなったさい[3)]，盛澄華が 1948 年に上海で上梓した『紀徳研究（ジッド）』を実見できなかったのが悔やまれ，以来同書の存在は常に気にかかっていた。文革ヴァンダリスムの標的にされ稀覯書となったのだろう[4)]，それなりに探索を尽くしたにもかかわらず初版はいまだ入手に成功していないが，幸いにも同書は昨年 8 月，『盛澄華，ジッドを語る』と改題のうえ，桂林の広西師範大学出版社から 64 年ぶりに再版され（言うまでもなく簡体字表記），これによってようやく筆者も記載内容のあらましを知ることができたのである[5)]。

さて同書は，1934 年から 47 年にかけて国内誌に発表された論文 9 篇と，年譜などの附録，そして再版にあたり巻末に添えられた関係者 2 名（著者の旧友で詩人の王辛笛（ワンシンディー）とその息子・聖思（シャンスー））の回想・証言から成る。盛澄華のジッド論は，今日の研究水準に照らせばもはや特段鋭い指摘・分析を含むとはいえぬが，少なくとも同時代の欧米諸国や日本の研究と並べて見劣りのするようなものではない。フランス文学，いや外国文学全体が単なる読書対象の域を出ていなかった当時の国内事情を思えば，抑制の効いた筆致で作家の思想や作品を手際よく概観・整理した好論であり，先駆的女性研究者・張若名（チャンルオミン）による『アンドレ・ジッドの態度』（リヨン大学博士論文，1930 年初版刊）[6)] に続く学術的業績と評して差し支えない。

しかし同書を参照して何よりも筆者が驚いたのはその「附録」である。冒頭の簡略な作品年表に続く頁には，なんとジッドが盛澄華に宛てた書簡 14 通が名宛人自身による中国語訳で採録されていたのだ。しかも内 1 通にはオリジナル

の複製も掲げられており，資料の真正性は疑うべくもない。この書簡群は国外ではその存在さえ知られていないだけに，またオリジナルは灰燼に帰したか，たとえ現存するとしても所在の同定は容易ならざるだけに[7]，まずは日本語への重訳によって両文通者の交流の具体相を提示・紹介したい（フランス語訳もいずれ公表の予定）。ちなみに原著では書簡の翻訳が示されるだけで解題や註の類いは一切なく，はたして一般読者が内容を細部まで精確に把握しうるものか甚だ疑わしい。かかる点に配慮し，本稿では書簡記述の流れにできるだけ空隙を生じさせぬよう，本文および註において適宜補説をくわえる[8]。

*

書簡の提示に先立ち，名宛人の経歴をごく手短に述べておくと――。盛澄華は 1912 年，浙江省杭州市蕭山区の生まれ。同区や紹興市・上海市で初等・中等教育を，復旦大学外文系・清華大学外文系で高等教育を受けた。1935 年に清華大学を卒業，直ちにパリ大学文学部に留学。彼の地では学位の取得よりは，むしろフランス文化全般に親しみながら実地での文学研究を優先した。言うまでもなくジッドとの親交がその最大の成果である。また留学中の一時期，イギリスのエディンバラ大学で英文学を学んでいる。39 年 11 月，4 年間の留学を終え中国に帰国。翌年，陝西省城固県の西北大学に副教授として着任。43 年に復旦大学外文系教授，47 年には母校・清華大学外文系の教授となる。国共内戦も終盤の 49 年 3 月，人民解放軍に率先志願，第 4 野戦軍南下工作団に配属されるも，半年後には肺を患い治療のため北京に戻っている。翌 50 年，清華大学外文系に主任として復帰，52 年には全国高等院校の改編にともない北京大学西語系教授に転任，と若くして着実にキャリアを重ねた。その間（かん），中国作家協会に属し多くの著述を発表したが，ジッドにかんしては先述の著書『紀徳研究』を纏めるいっぽう，43 年から 45 年にかけて『地の糧』『贋金つかい』『ジュヌヴィエーヴ』を翻訳・出版，また 48 年には『架空会見記』の翻訳を大手新聞に連載している。さらには，版元・刊年のいずれも不詳ながら『ユリアンの旅』や『オスカー・ワイルド』『文学的回想と現今の諸問題』の中国語訳も物したらしい[9]。しかしながら「社会主義の叛徒」とされた作家を専門としたことがとりわけ裏目に出，平穏な学究生活を全うすることはかなわず，その後の悲劇的な晩年に

ついてはすでに触れたとおり。1969 年，北京大学の一員として江西省の鯉魚洲農場へ下放され，過酷な労働に従事。それがたたって翌年 9 月 20 日，突発性の心筋梗塞により同農場で没した[10)]。享年 57。

*

ジッドと盛澄華の交流は，後者のパリ到着から 1 年半後の 1937 年初頭に始まる。中国人青年からの丁重な手紙に感銘を覚えたフランス人大作家は，次の返書を送り，自宅を訪ねるよう強く促した――

《書簡 1》〔パリ 5 区，トゥルヌフォール通り 25 番地宛〕

〔パリ，1937 年 1 月 5 日〕

親愛なる盛澄華

素晴らしいお手紙を頂戴し，私は心から貴方の面識をえたい，またもっと早く自己紹介をしてくださっていればよかったのにと思います。

どうか拙宅をお訪ねください。近頃は午前中ならいつでもかまいません（ただ明日は不在にしますが）。精一杯歓迎いたします。敬具

アンドレ・ジッド

話し合いの内容は分からないが，半月後ジッドのほうから再度の面会を希望することからも，彼が盛澄華に好意と関心を抱いたことは間違いない――

《書簡 2》〔パリ 5 区，トゥルヌフォール通り 25 番地宛〕

〔パリ，1937 年 1 月 22 日〕

親愛なる盛澄華

また私に会いに来ていただきたい。気兼ねは無用です。拙宅においでください。近頃は午前中ならいつでもかまいません。あるいは電話をかけていただければ（アンヴァリッド 79-27 番），すぐに時間を決めることができましょう。敬具

アンドレ・ジッド

それから 2 カ月半ほどした 4 月 11 日，ジッドは偶々街中で盛澄華に出会う。だが，その時には人物の特定に自信が持てなかったらしく，次の書簡を送り非礼を詫びている――

《書簡 3》〔パリ 5 区，トゥルヌフォール通り 25 番地宛〕

〔パリ，1937 年 4 月 13 日〕

親愛なる盛澄華

一昨日通りで出会ったのは，もしや以前に私に会いに来てくださった貴方ではないでしょうか。

実のところ確信がもてないのです。なぜなら先週，ある中国人青年が分厚い原稿の束を送りつけ，私に意見を求めて，数日内に会いに来ると言っていたのです。この原稿は「碌でもない」ものと感じられましたし，また〔目を通して見ると〕実際そうでした。そのため，〔通りで会ったさい〕私はかなり突っ慳貪な物言いをしてしまい，相手もきっとそれを感じとっただろうと思います。そういう訳で，私は人違いをしてしまったのではないかと気がかりだったのです。

この手紙を差し上げたのは，私が貴方に話した些事を気になさらぬよう申しあげるためです。例えば「イタリアからも手紙を寄こしてほしい」云々のことです。もしパリを発たれる前に少しばかり時間を割けるなら（私自身も数日後にはパリを離れますが），拙宅においでいただきたい。貴方とお話できればと思います。

仮にあの日私が出会ったのが貴方でないとしても，一度会いに来ていただければと存じます。敬具

アンドレ・ジッド

第3段落のイタリア絡みの話題は次の書簡と併せた補説に回そう。いっぽう同じ段落の「数日後にパリを離れる」という記述は，1週間後の4月20日，アヴィニョンで作家のピエール・エルバール（ジッドとの間に娘カトリーヌをもうけたエリザベート・ヴァン・リセルベルグと1931年に結婚）と合流する予定のことを指す。ジッドは「何としても彼の本〔旅行記『ソヴィエト連邦にて』〕の内容を知り，また自作〔出版予定の『ソヴィエト旅行記修正』〕を彼に読んで聞かせる必要」[11] を感じていたのである。

上掲書簡でジッドは再度の面談を希望していたが，実際に盛澄華が彼の家を訪れるのは5月に入ってのこと（おそらくは作家が数日滞在の予定でキュヴェルヴィルに向かった11日の少し前）。それからしばらくしてジッドは文通者に次の短信を送っている――

《書簡4》〔パリ15区，ジャヴェル通り185番地宛〕

〔パリ，1937年5月22日〕

親愛なる盛澄華

貴方が仰っていたご兄弟の具合が気がかりです。しかし貴方がミュンヘンで彼に出会われたさい，病状が案じたほど重くはないことを祈っております。

そうです，貴方が訪ねて来られてから何日もしないうちに，私はペッレグリーニにかなり長い手紙を送りました。それでは，よい旅を！ 敬具

アンドレ・ジッド

ジッドがパヴィーア大学教授アレッサンドロ・ペッレグリーニに送った長い手紙とは5月15日キュヴェルヴィル発信の礼状のことで，そのなかでジッドはペッレグリーニの近著『アンドレ・ジッド』（フィレンツェ，ラ・ヌオーヴォ・イタリア社，3月16日刷了）への謝意を縷々述べるが，まずは書状の冒頭で盛澄華に言及している――「私が貴方へのメッセージを託していた愛すべき中国人青年がイタリアから帰ってきたので会いました。貴方の歓待を喜び感謝していました。彼が言うには，ご親切にも出版に先立ち送ってくださったご高著の校正刷をおそらくジッドは受け取っていなかったのだろう，そう示唆することで私の無沙汰を詫びようとしたそうです。いや，そうではありません。校正刷は確かに拝受しており，貴方の寛大さにすがるほかにお詫びのしようなどないのです。私のことを書いた本でなければ，おそらくはもっと早くご返事を差し上げていたことでしょうが，云々」[12]……。先に提示した4月13日の盛澄華宛書簡の話題もこの不義理に絡むものだったと考えて差し支えあるまい。

同年7月には『ソヴィエト旅行記修正』（6月23日刷了）が出来（しゅったい）する。ソヴィエト連邦が内包する根本的矛盾を初めて告知した同書の出版によって，ジッドが内外の左翼陣営からの激しい非難・攻撃に晒されたのは周知のとおり。以後，彼には「社会主義の叛徒」のレッテルが貼られてしまうのである。この喧噪を逃れるかのようにジッドは，7月末から3週間ほど少壮作家ロベール・ルベックとイタリア各地を旅行する。パリに帰着したのは8月20日。それから10日ほど後，盛澄華に次の書簡を送って『修正』の献本を予告している――

《書簡5》〔パリ15区，ジャヴェル通り185番地宛〕

〔パリ，1937年9月1日〕

親愛なる友

私は今夜パリを離れます。だが16日には数日の予定で帰京するかもしれません。貴方からお便りをいただき嬉しく思います。『ソヴィエト旅行記修正』をお送りしますが，まだ献辞を入れていません。どの献本にも入れないだろうと思います。敬具

アンドレ・ジッド

同夜ジッドがパリを離れて向かうのは，妻マドレーヌの暮らすキュヴェルヴィル。当地ではシェイクスピア『アントニーとクレオパトラ』の翻訳（翌年初出）に打ち込んだ。その後は書簡にあるとおり同月中旬パリに戻り，続いて20日から月末までポール・デジャルダン主宰の「ポンティニー旬日懇話会」に出席し

ている（そのときの統一題目は「精神的混乱と絶望の時代における芸術の社会的使命」という，まさにヨーロッパの現状を映したものであった）。

その後，盛澄華は街中のアパルトマンを出て，各国からの留学生が居住するパリ市南部の国際大学都市に移る。新住所から彼はジッドに，戦時状況にかんする所感をふくむ内容豊かな手紙を送ったようだ。次はそれにたいするジッドの返信――

《書簡 6》〔パリ 14 区，国際大学都市スイス館宛〕

〔パリ，1937 年 10 月 14 日〕

親愛なる盛澄華

素晴らしいお手紙に深く感動したしました（新しいご住所はすでに控えました）。貴方の話はどれも実に興味深い。この恐ろしい戦時下，私がどちらの立場に賛同するか申しあげることは差し控えますが，きっと貴方ご自身は分かっておられるでしょう。もし一両日中にパリを離れるのでなければ（離れるとしても短時日ですが），なんとか都合をつけて，すぐにでも貴方にお会いできるのですが。それが叶わず少しばかり遅くなっても，貴方と固く握手を交わすのを今から心待ちにしております。

アンドレ・ジッド

ジッドは彼と会う機会をもったのだろうか。書状の文面は否定的なニュアンスだが，具体的な資料・証言がほかに見当たらないため，これについては残念ながら不詳とせざるをえない。

1938 年 4 月 17 日，復活祭の日曜日にマドレーヌがこの世を去る。唯一無二の精神的支柱を失ったジッドの悲嘆は大きかった。その翌々月，英文学の研修のためエディンバラに着いて間もない盛澄華から便りが届く。心のこもった哀悼の言葉はたとえ一時（いっとき）ではあれジッドの慰めとなる。だがとりわけ彼を喜ばせたのは，自作『田園交響楽』を読み解く文通者の慧眼であった。その感動を率直に述べたのが次の返書――

《書簡 7》〔エディンバラ（スコットランド），グレンガイル・テラス 16 番地宛〕

〔パリ，1938 年 6 月 9 日〕

親愛なる盛澄華

貴方のお手紙は実に興味深かった！ 深く感動しました。貴方は私に代わり，かくも緻密に『田園交響楽』の誤りをいくつか指摘してくださったが，これには本当に驚かされました。『狭き門』と『贋金つかい』についてもかつてある人が似たような誤りを指摘してくれたことがあります。これらによって私の時系列感覚の欠如が露わになりました。「時」の調整のために私がどれほど苦労したかを知っていただけたならば！

しかし，すべては徒労だったのです！ 私はお手紙を大切にとっておきます。貴方のように本当に緻密な読者は稀有な存在です！ 間違いなく，この作品（『田園交響楽』）を執筆中，筆を置いてはまた筆を執りを何度も繰り返していたこと，また私自身の焦りが，このような矛盾を生み出す原因となってしまいました。ただ，〔今になって気づくことですが，作品の素材となった〕私自身の日記のなかに〔すでに〕類似の状況〔日付の不整合〕が存在していたのです。

親愛なる盛澄華，〔妻の死にたいする〕このたびのお心のこもった同情に深く感動しております。貴方のほうでも貴方にたいする私の想いをどうかお信じください。数日後にはオランダに行くことになっており[13]，再度ゆっくりとお話をする時間もありませんが。敬具

アンドレ・ジッド

盛澄華が指摘した『田園交響楽』（「新フランス評論」1919 年 10 月号–11 月号に初出，初版は 12 月 15 日刷了）の「時の誤り」とはおそらく次の点――。ジェルトリュードの盲目は治療可能だと知った牧師が歓喜に満たされ，彼女を固く抱きしめるのは，自筆稿段階では「（189...年）5 月 9 日」のこととされていた。だがその後，作者の現実の生が虚構のなかにダイレクトに侵入してくる。すなわちジッドは，マルク・アレグレ青年への愛を強く自覚した「（1918 年）5 月 19 日」を内心の記念日として自作に刻印すべく，公刊テクストでは上記「5 月 9 日」をはじめ 7 つの日付をそれぞれ 10 日ずつ後退させるのだ。だがこの強引ともいえる操作によって後続の日記記述とのあいだに時系列の不整合が生じる結果となったのである[14]。

この後まもなく盛澄華は，やはりフランスに留学しており，かねてより交際中だった同国人女性・韓恵連（ハンフイリェン）（彼女も中国に帰国後はフランス語系の教授職に就く）をエディンバラに呼び寄せ，同地で結婚式を挙げている。8 月末には新妻とともにフランスに戻り，パリ近郊アルクイユに居を定めるが，彼がジッドに近況を報告したのは秋も終わりのことであった。次のジッド書簡はそれにたいする返信――

《書簡 8》〔アルクイユ（セーヌ），ジャンヌ・ダルク大通り 1 番地宛〕

〔パリ，1938 年 11 月 21 日〕

親愛なる盛澄華

貴方のお手紙は実に周到な内容で，私は深い感銘を覚えました。お送りいただいたという婚礼の招待状は行方知れずですが，私は林（リン）氏から（彼とはシトレで会えて幸いでした），ようやくご結婚の報を受けました。今までお祝いを申しあげられなかった

のは，貴方にもっと早く私を慰めに来ていただけなかったのと並んで残念なことでした。〔しかし〕我々は誰からも責められることはありますまい。そうです，この数カ月来，亡妻を偲び甚く意気消沈していますが，私の作品を読んでいただければ，貴方には我が人生で無限の地位を占めた，最も崇拝する彼女の存在をきっと慮っていただけたでしょう。私は，ご夫人が亡妻と同じような容貌と美徳を備えておられることに祝意を申しあげる次第です……。

私がいかに多忙であれ，以前のように貴方とお会いしたい。すでに貴方はパリから遠からぬ場所にお住まいなのだから，朝のうちに拙宅においでになれましょう。あるいは，また前もって電話をかけていただき時間を決めることにいたしましょう。敬具

アンドレ・ジッド

追伸――貴方が送ってくださった正誤表に感激しています。新フランス評論に送りますので，近刊予定の『全集』第 15 巻（これが最後の巻です）で訂正されているかご確認ください。

盛澄華の結婚の話題をめぐっては作家側の失言で，一時的にではあれ思わぬ齟齬をきたすことになるが，それについては後述。またジッドがヴィエンヌ県ヴーヌイユにあるイヴォンヌ・ド・レトランジュ子爵夫人の私邸シトレ館に滞在したのは 4 月中旬の数日間だが（彼がマドレーヌの訃報を電話で知らされたのも同館滞在中のこと），そこで彼が会った盛澄華の知人「林」とは，確証はないものの，あるいは『ソヴィエト旅行記』の中国語訳（亜東図書館刊）を前年上海で上梓していた林伊文（リンイーウェン）のことか。追伸についても付言すれば，盛澄華は NRF 版『ジッド全集』第 15 巻（翌年 3 月 23 日刷了）掲載予定のテクストについて現行版の誤植等を指摘したものと思われる。

同じ年の 6 月，日本では山本薩夫監督，原節子・高田稔主演の東宝映画『田園交響楽』が封切られる。悶着は秋になって起きた。映画が原作者や版元には無断で翻案・制作されていたことが伝わり，それまで日本に好意を寄せていたジッドもさすがに不快感を隠せなかったのである。フランス文壇の大御所と揉めることは対仏文化政策上も大きな損失となるので，日本大使館としても対応に苦慮するところとなった。だがジッドは，間もなく差出人不明で送られてきた映画のスティル写真を眺めるや態度を一変し，是非ともこの作品を観たいと思いはじめる。その意向は早速，新フランス評論の翻訳部長ロベール・アロンから，元報知新聞特派員・小松清を介し宮崎勝太郎参事官（のち代理大使）へと伝えられる。かくて 10 月 19 日，日本大使館応接室に作家本人，参事官，ア

ロン，小松の4者が集まり対策を協議（読売新聞パリ支局長・松尾邦之助も報道関係者として唯一人同席）。話し合いは，試写会の実施や日仏間の相互出版計画をめぐり，終始和やかな雰囲気のなかで進められた[15]。年が明けて1939年の5月4日，先の取り決めにしたがい，シャンゼリゼ大通りの映画館（おそらくはマリニャン座）で新フランス評論の関係者に向けた試写がおこなわれる[16]。当時の小松の証言によれば，この「ジッドを主賓として催された第1回試写会に出席した〔ジュール・〕シュペルヴィエル，〔ジャック・〕マドール，クララ・マルロー，〔テア・〕シュテルンハイム，〔マルク・〕アレグレ，ロベール・アロン，ジャン・ポーラン，その他の人々の心からの称賛の言葉。あの気難し屋で有名なジッドさえ嬉しさを抑えることができず，宮崎代理大使や僕たちの手をかたく握って喜んでくれた。ジッドは原節子を《天才的な女優》の名をもって呼び，最大級の賛辞を呈した」[17]。その「情けないお粗末な音楽」を別とすれば，原作者にとって映画は申し分のない出来だったのである[18]。

ちょうど同じ頃，ジッドはある機会に顔を合わせた盛澄華を日本人と誤認し，思わぬ失言をしてしまう。この一件は大きな悔いとしてジッドの記憶に永く残った。4年半後の『日記』（1943年10月）は，なおも消えぬ心の痛みとともに事の委細を語っているが，次の盛澄華宛書簡の補説ともなるので，まずはその記述を全文引用しよう――

この数日，盛澄華のことをよく考える。そのたびに最後に会った後，彼を残酷にも傷つけたに違いないあの不器用で愚かしい言葉が思い出され胸が痛む。自分でもまるで分からない。そしてそこには悪意も底意もない。もちろん私の心からは遙かに遠いあの言葉を彼はどのように解釈しえたのだろうか……。

私は盛から感動に満ちた，そして読む者を感動させる2通の長い見事な手紙を受けとっていた。私はそれを大事にしまっている。〔現在滞在中のモロッコのフェズから〕いつかパリに戻ったらまた見つけ出したいと思う。彼が私にそうした感情を示してくれたのは，私の作品のせいだった。なぜなら盛は非常な教養人だったから。まだごく若い時に中国からパリに勉強に来ていたが，あまり学生たちとは交わらなかったようだ。彼自身の物腰の洗練された繊細さ，遠慮がちな様子，魅惑的な慎み深い態度などから察すると，周りの学生たちは彼には卑俗な社会の人間に見えたに違いない。彼は立派な家の出であることが感じられた。我々〔フランス人〕のなかに身を置いて，どんなにか自分が異郷にあるのを痛感したことだろう！

彼は結婚した旨を知らせにやって来て，遠い故国に帰る前に若い妻を私に紹介したいと語った。何を勘違いしたのだろう，何を戸惑ったのだろう，何たる言葉を口走っ

たのだろう。私はその時,「もちろん日本の女性と結婚なさったのでしょう？」と尋ねた。私は，彼の表情がいきなり変わり，微笑が消え，唇が震えるのを見た。彼は口ごもりながら言った。「日本の女性ですって！…… おお！ ジッドさん，どうしてそんなことを……」。取り返しがつかなかった。私にはこの場違いな言葉を取り消すことはできなかった。説明したり言い訳したりしてみたが無駄だった。当時私は『田園交響楽』を映画化した大勢の日本人と頻繁に会っていた。そんなことからおそらくこうした突然の許しがたい混同が生じたのだ。すぐに私は，我々の間に生まれかかった友情，彼のほうから心よりの信頼を寄せている友情に，おそらく致命的な打撃を与えたことに気がついた。そして今日もまだ，そうした自分のことを許しがたく思っている。

彼はいったいどうなっただろう？ 再び会うことがあるだろうか？ 私がこれを書いているのは，いつかこれが彼の目にとまり，彼の思い出は私の心のなかで変わることなく芳香を放っていると知ってもらいたいためなのだ。[19]

失態を強く意識するあまり詫び状を書きあぐねていたジッドのもとに盛澄華から「率直な表明」が届く。これに力を得て綴られたのが次の書簡である。だが『田園交響楽』映画化にも触れるその記述は，祖国が日本と交戦中の友を慮ってのことだろう，試写会関係者への感謝や映画そのものへの手放しの評価とは打って変わり，辛辣な対日批判の色を帯びざるをえなかった――

《書簡 9》〔アルクイユ（セーヌ），ジャンヌ・ダルク大通り 1 番地宛〕

〔パリ，1939 年 5 月 13 日〕

親愛なる盛澄華

お手紙の内容のすべて，貴方のお考えのすべてが，まさに私自身の思うところです。ただひとつ私の気持ちを安んじてくれるのは，お手紙のように貴方がすぐ率直に表明してくださったことです。私は，最初の間違い（その原因は，私の視力がすでに弱っており，またあの時私の座っていたのが正に陽光と向き合う位置だったために，お姿がただぼんやりとしたシルエットにしか見えず，しばらくしてやっと貴方だと分かったのですが，時すでに遅し）と，貴方が私との会話から覚えられた不快感とについて，心中ひどく辛く思っていました。しかし我々の友情に鑑みて，ふたたび誤解なさることのないようお願いしたい。たしかに私は唯ひとりの日本人には好意を寄せていますが，彼は私とはすでに 40 年来の面識がある人です。元々は駐仏特派記者でしたが，その後本国政府の現下の施策に強い反感を抱いたために，今は非常に難しい立場にあります[20]。最近になって『田園交響楽』が映画化されたため，私は日本の官吏と時々儀礼的なやりとりを交わすようになりましたが，これとて私がずっと抱いていた〔日本にたいする〕印象を変えるものではありせんでした。とりわけ信じていただきたいのですが，もし最初から貴方とは見分けがつかず，日本大使館の一員と誤解していたのでなければ（というのもこの官吏はちょうど当日の午前中に私を訪ねてくる予定だったのです），貴方への応対は決してあのようなものとはならなかったでしょうし，

私も貴方にたいしこんな不始末を働くことは決してなかったでしょう。その後，己の過ちを認めてからも，私は心中に起こった羞恥と狼狽で貴方にたいし合理的な説明ができなくなってしまったのです（考えを改め，冷静さを取り戻すのに私は何とぐずぐずしていたことか！）。そうです，己が招いた不祥事を思い，（私にとってはすでに掛け替えのないものとなった）貴方からの敬意と友情の喪失，取り返しのつかぬ事態を思って，どうしてよいか分からなくなってしまったのです……。貴方のお手紙にどれほど感動したことか。なぜならば，少なくともそれは私に釈明の機会を与えてくれたからです。

かつて私は日本語版全集に序文を寄せるのを断ったことがありますし，今も〔たとえ依頼があっても〕同じように断りたいと思います。しかしこの映画（『田園交響楽』）の撮影については事前に何も知らなかったのです。私の同意を得たものでもなく，私には何も利するところはありませんでした。だが一時の好奇心から，見てみたいと言うと（今となってはこれが軽率であったと分かりましたが），日本大使館はひどく慇懃な態度を見せたので，新フランス評論や私も邪険に扱うことができなくなってしまったのです。これはすでに甚だ行き過ぎた行いであり，私は繰り返し慚愧の念を表明するほかありません。なぜならば，貴方のおっしゃるとおり，私にはそれが他事にこと寄せた宣伝活動であったのを分からぬわけではなかったからです。

少なくとも貴方にはご理解をいただきたい。貴方が祖国への憂慮にくわえて個人的な憂慮を抱いておられることは（しかしこの手紙でそれがすべて洗い流されてくれるならば！），私にも痛恨の極みです。どうか信じていただきたい，この件について私の思いはすべて貴方の思いと同じなのです。私の真心からの情誼を決して疑わないでください。再会を期して，敬具

アンドレ・ジッド

ちなみに第2段落冒頭に挙がる「日本語版全集」とは，1934年3月に刊行開始，翌年10月に配本完了した建設社版『アンドレ・ジイド全集』（全12巻）のこと。同時期出版の金星堂版（全18巻）と競合した，当時としては本格的な翻訳全集であったが，ジッドの序文執筆辞退について補説しておくと，刊行開始後まもなく詩人の川路柳虹を介して仏文学者・山内義雄（『狭き門』『贋金つかい』などの翻訳を担当）の依頼を受けたパリの松尾邦之助が1934年6月5日，直接作家宅に赴き，同全集の読者に向けたメッセージを請うたのがその発端。この面談でジッドは当初，日本の軍国主義的傾向，自身のソヴィエト連邦への共感を理由に難色を示したが，「政治的日本」ではなく「精神的日本」のために是非一筆を，という松尾の説得に折れ，回答に半月の猶予を求めながらも真剣な検討を約する。少なくとも松尾の側からすれば，「君に宛てた手紙風にしてもよいか」などの言葉からジッド受諾の確かな感触を得たのである。じじつ建設社編

集部はこれをまたとない吉報と喜び，早速松尾の会見記「ジイドとの一問一答」を「ラ・フゥルミ」と題した全集月報に掲げている[21)]。しかしながらその後，作家からは何の音沙汰もなかった。7月10日，もはや首尾の芳しからぬを察した松尾は長文の書簡を彼に送り，今度は日本の政治的立場の釈明・弁護に重きをおかざるをえない。これにたいし婉曲な断り状が届くのはようやく翌月に入ってからのことであった[22)]。

上掲書簡の後，戦争勃発（9月3日，対独宣戦布告）を挟み一時的に交流が途絶える。文通が復活するのは11月，盛澄華が妻とフランスで生まれた長男を連れて母国に帰ってからのことであった。ジッドは10月初から南仏ニースのシモン・ビュッシー夫妻宅に居を定めていたが，次に引くのは盛澄華から久方ぶりに届いた便りへの返信――

《書簡10》〔上海フランス租界，ドルフュス通り68番地に転送〕

〔ニース，1939年11月28日〕

親愛なる盛澄華

私は本当に貴方のことを案じており，アンリ・トマに手紙を書いて，貴方から便りがあったか，貴方の行方を知っているかと尋ねてみたところです。すると早速この喜ばしいお手紙が届いたのです。どれほど私はご帰国前にもう一度貴方とお話ししたいと思ったことでしょう。というのは，先だって貴方がヴァノー通り〔の拙宅〕に会いに来てくださった時，私がした話のいくつかは実のところ荒唐無稽なものだったからです。長い歴史をもつこの世界を震撼させた苦難は，今我々を離ればなれにしてしまいました。しかしその苦難も我々の友情を失わせることはできません。貴方にたいする私の友情は今やまさに掛け替えのないものであり，将来も永く続いてゆくということを，どうかお知りおきください。

お手紙のなかに，いつの日にか貴方の祖国で私とまた会いたいとあったのを嬉しく思います。この共通の夢を私は心のなかに持ち続けましょう。嗚呼！ 今は何も計画はありませんが，中国を知りたいという願いはここ数年次第に私の心のなかで強くなっています。また貴方と知り合って以来，この夢は私にも実現の見込みがありそうに思われています。信じていただきたい，私は貴方を忘れることなどできません。

手紙で旅の安全を知らせていただければとても嬉しく思います。ご夫人とお子様たちが長旅のあいだに災厄に遭わないように願っています。彼らに我が慈愛の微笑と祝福を。

私はすでにパリに手紙を書いて貴方宛に『日記』を一部送らせました。というのも，この『日記』は〔完売してしまい〕もう市場には出ていないからです。

親愛なる盛澄華，またお会いしましょう。敬具

アンドレ・ジッド

冒頭部で言及される盛澄華の安否を尋ねたアンリ・トマ宛書簡は今日まで所在が確認されていないが，他の残存する同者宛によれば，ジッドは前年の 11 月，この少壮作家に同世代の盛澄華（ともに 1912 年生まれ）を紹介していた――「友人の盛澄華と話をしていて，君も彼と話をすれば楽しかろうし，彼にとってもそうだろうと思った。という訳で，迷うことなく彼を君の元に差し向ける」。また戦況厳しい 2 年後のトマ宛書簡（ニース発信）では次のように記している――「盛澄華さえもが君のことを案じ，住所を尋ねてきた。彼の手紙が君の手元に届くあいだに，おそらく住所は変わってしまっているだろうが，いずれにせよ彼にはこの住所を伝えよう。彼の住所のほうは，上海フランス租界，ドルフュス通り 68 番地，云々」[23] ……。なお書簡末尾にあるジッドの『日記』とは，プレイアッド叢書版『日記（1889-1939 年）』（同年 5 月 20 日刷了）のこと。存命作家の作品が同叢書に収められたのはこれをもって嚆矢とするが，そういった新味も『日記』の評判を高め，初版 6,000 部はまたたく間に完売，翌年・翌々年と立て続けに再版・三版が刷られた。読者の求めはなおも治まることはなかったが，戦時下の物資不足のために重刷はかなわず，後述するように戦後まで品薄状態が続くことになる [24]。

上掲書簡から次の 1947 年 5 月付書簡まで，7 年半も文通が途絶していたか否かは即断できないが，いずれせよ戦争による長期の空白をへた後の交流再開であったことは間違いない。ジッドは 4 月 28 日，娘カトリーヌの家族とともに 5 週間余り滞在したスイスのティチーノ州アスコナからパリに帰着したばかりであった――

《書簡 11》〔上海市江湾区，復旦大学廬山キャンパス宛〕

〔パリ，1947 年 5 月 4 日〕

ふたたび見出した親愛なる友

素晴らしい長文のお手紙をようやく一昨日，つまり私がパリに戻って 2 日目に拝受。（この遅れは，ありがた迷惑な「名声」ゆえの避けがたい雑事で私が疲労困憊だったためです！ 私は〔それまでは〕ひと月来スイスで，ヴァノー通り〔パリの居所〕ではもう享受しえぬ清閑の喜びを密かに得ていたのですが。）お手紙を拝読し，本当に感動しました。久しく待ち望んでいた貴方の便りをやっと受け取ったのですから！ そして私は早速，心からの喜びをもってこの返書を認めています。私はいつも貴方のことを想っているのです！ さほど大きな望みは抱いていなかったとはいえ，東方からの便りは届いていないかと何度も探したものでした。そしてついに貴方を探し当てたのです。私には互いの音信が途絶えていたことを敗北とは考えられません。我々は長き

にわたって堪え忍び，ついにその報償を獲得したのです。お手紙の日付は 4 月 16 日でしたので，この手紙も 5 月末までにはお手元に届くことと思います。貴方の報せは嬉しく拝受しましたが，次にお手紙をくださる時は，4 人のお子様とご夫人（私の心からの挨拶を私に代わって彼らに伝えてください）の写真を何枚か送っていただきたい，もちろん貴方自身の写真も……。貴方のご努力はなんと驚嘆すべきものであることか！ 貴方によって（貴方の論文と翻訳をつうじて）遠い地に新たな友情を得たことは，私にとってこの上ない慰めとなります。何冊か近作（なかでも『テセウス』は一種の精神的遺言と見なすことができましょう）を進呈しようと思いますが，しかしご安心ください，私の『全集』（貴方の仰るところの大型版）は 15 巻までしか出ていないので，貴方が持っておられるもので全てです。印刷用紙の不足で拙著の多くがもう絶版になってしまい，フランスではなんとパリでさえ見つけるのが難しいのです。書店にわずかにあるものもすべて表には出ず，「ブラックマーケット」で法外な高値で売られています（「プレイアッド版」の『日記』は一部 15,000 フランで売られていました）。すでに版元ができるかぎり再版しようとしていますが，全く需要に応えきれていません。

貴方のお手紙にある在重慶フランス大使館の文化アタッシェの事情についてはさほど驚いてはおりません。しかし，長年にわたり私の作品とその影響にたいし無慈悲な攻撃を繰り返したのち（クローデルは最近もなお然り），多くのキリスト教徒が態度を変えました。そのなかのひとりポール・アルシャンボーは，最近一冊の著書〔『アンドレ・ジッドの人間性』〕を発表し，私の批評的著作を最上ランクに位置づけています。もちろん同書では彼もキリスト教徒の立場から私の罪科を定め，いわゆる私の「学説」の破綻と失敗を論じています。しかし僅かながらですが，賛同の智慧が途切れることなく滲み出はじめています……。すでに態度の変化の兆しが認められ，また少なくともそれは，私の作品に先入観を抱いた，あるいは敵意を抱いた読者の一部に注意を促す結果となっているのです。私はこの本と，まだ差し上げていなかったすべての拙著を貴方にお送りしたいと思います。明日発送の準備をしますが，「普通郵便」を使うと何日ほどでお手元に届くのでしょうか。

色々な方面から催促を受けており，今日はもうゆっくりとお話しする時間がありません。しかし肝心なのは，我々が必ずや再会し，お互いこの友情に忠実たることです。この友情こそは私が心中とりわけ大切にしているものなのです。

アンドレ・ジッド

第 1 段落で言及される NRF 版『ジッド全集』は大戦勃発によって 1939 年 3 月刷了の第 15 巻を最後に未完のまま終わったが，文通者旧蔵の揃いについて王辛笛は次のような証言を残している――「澄華の死後間もなく，北京東安市場の中原書店で何とジッドが彼に贈った自筆献辞入りの全集が見つかった。知らせを受け直ちに購入・保存したいと思ったが，残念ながら私は遠く上海におり，

手紙で遣り取りをする間にそのジッド全集はどこかの有識者に買われ，二度と手に入らなくなってしまった」[25]……。また，とりわけプレイアッド版『日記（1889–1939 年）』は数年来極端なまでの品薄状態にあったが，この翌年第 4 版が出来するにいたってようやく供給が追いつく（若干数の新たな修正を施された同版が以後永らく定本として一般に流布）。第 2 段落でクローデルの頑な態度とは対比的に扱われるアルシャンボー『アンドレ・ジッドの人間性』（1946 年 6 月刷了）について付言すると，ジッドは著者自身への礼状（同年 9 月 25 日付。稿末の「関連資料」を参照）においてばかりか，第 3 者宛の書簡でも同著を高く評価していた。たとえば 10 月 7 日付のコロンビア大学教授ジャスティン・オブライエン宛では盛澄華宛とほぼ同じ旨を述べている――「断固たるカトリック的観点と，それに発する少なからぬ指弾にもかかわらず，〔この本は〕全き善意にもとづく最良書，批判は不可避的に含むにせよ，共感に溢れた最良書のひとつです」[26]。

この 2 カ月半後，盛澄華から新たな手紙を受けたジッドは次の書簡を返している。自身の著書とその中国語訳にかんする話題が主たる内容であった――

《書簡 12》〔上海市江湾区，復旦大学廬山キャンパス宛〕

〔パリ，1947 年 7 月 31 日〕

親愛なる盛澄華

どれほど嬉しい気持ちでお手紙を拝受したことでしょう！ 長文のお便りにご返事しようとしましたが，その時間がとれません。とりあえずは貴方のいくつかのご質問にお答えしましょう……。だがまずは，レバノンでの私の講演（その後ブリュッセルでも講演しました）を気に入っていただけたと知り大変嬉しく思います。手元に数部ある珍しい版を一部お送りしますが，貴方がすでに英語訳から翻訳なさったということで，後追いのかたちとなってしまったのは本当に残念です。

送ってくださった本（『贋金つかい』『地の糧』『ジュヌヴィエーヴ』〔の中国語訳〕）はすでに拝受しましたが[27]，最後の一篇には少々驚かされました。というのも『ジュヌヴィエーヴ』はあの 3 部作のひとつですが，〔ここでは〕『女の学校』『ロベール』と並置されておらず，その意義が明確には示されていないからです。

お手紙にある写真はまだ届いていませんが，必ずや私に大きな喜びをもたらすものであることは貴方もよくご存知のとおり。私のほうも写真 2 枚を併せて進呈いたします。娘の写真を一緒に送ることができず残念です（手元に無いため）。彼女はもう「カトリーヌ嬢」ではなく，ジャン・ランベール夫人です。もうすぐ 2 人目が生まれます[28]。娘は貴方が気にかけてくださることをきっと喜んでいるでしょう。今晩のうちにもお手紙を彼女に転送します。手元に『女の学校』が無く（重版中），後でお送りす

るよりほかありません。今はまず，ご所望の『架空会見記』をお送りします。これは『……の故に』と題してアルジェで出版されたもので，フランス版よりも〔収録テクスト数の多い〕完全な版です[29]。

拙著に中国語訳があることをお知らせいただき有り難うございました。私の忠実な女性秘書〔イヴォンヌ・ダヴェ〕がただちに記録しました。

私は貴方が送ってくださった漢字の名が書かれたメモをこの封筒，そして本を詰めた包みに貼り付けました。願わくは一刻も早く貴方の手に渡らんことを。

私に代わって，夫人には心よりの敬意を，お子様たちには老朋友の精一杯若々しい微笑みをお届けください。

アンドレ・ジッド

第1段落の「レバノン講演」とは，ジッドが前年4月1日にラジオ＝レバノンの放送で，次いで同月12日にベイルート市内の映画館ロキシー座でおこなった『文学的回想と現今の諸問題』のこと（書簡にもあるように，この講演は翌々月ブリュッセルでもおこなわれた）。フランス語版テクストはまもなく作家ガブリエル・ブーヌールの解題を付し同地の「レ・レットル・フランセーズ」から出来していたが（2,050部限定，1946年5月31日刷了）[30]，英語訳は上掲書簡の時点ではまだ公刊されておらず，盛澄華がいかにして中国語に訳すことができたのかは不詳（註9で触れたように，単行書として出版されたのか否かもまた定かならず）[31]。ちなみにジッドが後追いのかたちで彼に贈った「珍しい版」とは，おそらくはベイルート講演を基に半分ほどの量にまとめた非売版テクスト『1946年8月18日ペルティサウでの談話』のことを指す[32]。

同じ年の秋，盛澄華は復旦大学から母校の精華大学に転任し，北京に居を移す。いっぽうジッドは，ジャン＝ルイ・バローと共同で翻案したカフカ『審判』の初演（10月10日，マリニー座でのルノー＝バロー劇団の上演）を間近に控えていた[33]。次の書簡はこの初演の1週間前にパリで認められたものだが，中国語訳では「スイスから発送」と記されている。しかし「初演後直ちにスイスに出発する」という書状の文言にもかかわらず，ジッドが友人でイド・エ・カランド出版の社主リシャール・エイド（ドイツ語読みリヒャルト・ハイト）の誘いを受けてヌーシャテルに赴くのは実際には同月29日のことであり，投函まで一カ月近くを要したとはいかにも考えにくい。まず間違いなく，ジッド自身は省いた発信地の記述を盛澄華が翻訳にさいし誤って補ったものと思われる——

《書簡 13》〔北京市，清華大学宛〕

〔パリ，1947 年 10 月 3 日〕

親愛なる遠方の友

ほんの僅かな時間を利用してこの手紙を書いています。ひとつには，私が翻案・脚色したカフカ『審判』の戯曲版がちょうどリハーサル中のため，忙しくてどうにも手が回らないのです。ふたつ目には，急遽スイスに赴かねばならず（初演が終わり次第出発するつもりです），当地で娘と合流する予定なのです。しかし，貴方の丁重なお手紙（8 月 17 日付）と，貴方とご家族の写真とが私に喜びをもたらしたことを是非ともお伝えしたい。夫人はとても優しそうだし，4 人のお子様は皆とても可愛らしい。スイスで娘に何枚か（彼女，私，彼女の夫と 3 才になるイザベルの）写真を撮らせ（私の手元にはろくな写真がないのです）貴方にお送りするつもりです。我々はまもなく生まれるイザベルの弟か妹を心待ちにしています。貴方に代わってジャン・ランベールとカトリーヌによろしく伝えておきます[34]。

パリでは常に細々（こまごま）とした雑事に悩まされており，自分の意に沿う仕事ができずにいますが，スイス到着後は（お手紙はヌーシャテルのイド・エ・カランド出版気付に願います）仕事が始められるでしょう。

貴方が北京の大学に転任し教鞭を執られていると知り安心しています。中国ほど訪れてみたい国は他にありません……。だが私はすでに年老いて，今となっては長旅が体にこたえることでしょう！ しかし貴方に再会し，自らご夫人に挨拶し，お子様たちに微笑みを届けられたら……。それは私にとって何と嬉しいことでしょうか。

親愛なる翻訳者にして友よ。敬具

アンドレ・ジッド

なおジッドがエイド宅に滞在するのは前年に続いて 2 度目。このたびも結果的に 4 カ月以上の長逗留となる。エイドが友人フレート・ウーラーと興したイド・エ・カランドは，優れた印刷・造本のゆえに晩年のジッドがとりわけ贔屓にした出版社で，同社からはこれまでに『青春』『帰宅』が，また以降は『テセウス』第 2 版や『ポエティック』『序言集』『交遊録』『エロージュ』が立て続けに上梓される。この年の夏に刊行が始まる『ジッド戯曲全集』（全 8 巻）にいたっては，ジッドがエイドに各巻の解題を委ねるなど[35]，通常の作家・版元の立場を超える厚い信頼関係が築かれていたのである。

11 月 13 日，スウェーデン王立アカデミーはジッドへのノーベル文学賞授与を発表する。6 月にはオックスフォード大学から名誉博士号を受けていたジッドだが，今回はそれをはるかに上まわる誉となった。授賞の理由は「真理への果敢な愛と深い心理的洞察をもって人間存在の諸問題を提示したその作品の重要性と芸術的価値にたいして」というものである。ただしジッドは健康状態が

15 Evole – Neuchâtel – Suisse 23 Décembre 47

Cher Sheng Cheng-hua

Je remettais de jour en jour ma réponse à votre longue et vaillante lettre du 10 Novembre, qui me donne de si intéressants détails sur votre existence actuelle et me permet de suivre en pensée votre travail — puis est arrivé le prix Nobel, honneur accablant qui n'était pas sans beaucoup à dire ces derniers temps (~~[illegible]~~ Stockholm en Suède si mon état de santé n'avait pas causé certaine faiblesse du cœur me retient à Neuchâtel et me rend incapable d'effort — pour je ne sais combien de temps) — Et voici votre nouvelle lettre, du 5 décembre et le long article de vous, que je ne dois de ne pouvoir comprendre. Ah! je voudrais vous écrire longuement ... les forces me manquent. et je crains bien qu'il ne me faille à jamais renoncer à ce voyage en Chine, que je me reproche seulement de n'avoir point fait lorsque mon cœur était encore plein de vaillance! Le plaisir que j'aurais à vous retrouver là-bas est là en proportion de l'amitié profonde et fidèle que je vous porte.

J'ai conservé toutes vos lettres, depuis la dédicace de vos ex-libris, et le sympathique [illegible] une des plus précieuses que m'ait apporté une vie semblable. Et combien je vous sens proche de ma vie! Nouvelles pie votre réflexion m'apporte, parce que vous jeunes, et si vaillants, je vous sens tout de suite comprenant. J'embrasse vos enfants, présente mes sentiments hommages à votre femme — et reçois bien affectueusement votre

Carl Spitteler

優れず翌月10日の式典はやむなく欠席，王立アカデミーおよびノーベル委員会に向けた彼のメッセージが駐瑞フランス大使ガブリエル・ピュオーによって代読された[36]。次の盛澄華宛は，式典の2週間後に綴られたもので，『紀徳研究』収録分の最終書簡（これについては写真複製されたオリジナルが存在するのでフランス語から直接訳出する）――

《書簡14》〔北京市，清華大学宛〕

ヌーシャテル（スイス），エヴォル通り15番地，〔19〕47年12月23日

親愛なる盛澄華

11月10日付の素晴らしい長文のお手紙に返事を差し上げず日延べを繰り返していました。お手紙によって私は貴方の現在の暮らしについて詳しく知り，またお仕事の進捗具合を思い浮かべることができました。その後ノーベル賞という大きな栄誉を得たので，健康状態がさほど悪くなければ，スウェーデンへ赴いていたでしょう（しかし近頃心臓が弱っているため，ヌーシャテルに留まらざるをえず――いつまでとなることやら――仕事もできないでいます）。そうこうするうち，新たに12月5日付のお手紙と貴方の長い論文をいただきましたが，〔論文の方は〕中国語が分からないのでまことに残念です。嗚呼！ 貴方と手紙で長々と語り合いたいが，私にはその体力がありません。私はもはやこの中国歴遊の夢を諦めざるをえないのではないかと恐れています。まだ気力の満ち溢れているうちに機会を逃したことを深く後悔しています！ 彼の地での貴方との再会から得られたであろう喜びは，貴方にたいする私の深い真実の友情に比例して大きくなったことでしょうに。私は我々が知り合ってこのかた，貴方のお手紙をすべて保存しており，貴方が私に示してくださる共感は今もなお生涯における最も大切なものです。貴方のご配慮によって若き学生諸君のなかに新たな友情を獲得できたことをどれほど私が感謝していることか。彼らにそのことを知り理解してもらいたい。お子様たちを抱擁し，ご夫人には心よりの敬意を表します。敬具

アンドレ・ジッド

追伸――«chartrouille»という語は完全に私の造語であり，翻訳にさいしてはそのままにしておくか，「蛸 pieuvre（octopus）」または「ウニ oursin」に変えてください。

ちなみにジッドが贈られた「中国語の長い論文」とは，上海の『中国作家』と北京の『益世報・文学周刊』の両誌に同時発表された「1947年度ノーベル文学賞受賞者ジッドについて」のこと[37]。また，追伸に記された耳慣れぬ語«chartrouille»は『ユリアンの旅』のなかに現れるもので[38]，その語義にかんする問い合わせこそは，次に引く盛澄華書簡の「同作の翻訳が完成間近」という記述に完全に符合する。

中国語訳されたジッド書簡は以上ですべてである。これにたいし盛澄華のものは僅かに1通だけだが，ジャック・ドゥーセ文庫が現蔵している（その他は今日まで所在不明で，本年6月に亡くなったカトリーヌ・ジッド女史のアルシーヴにも残っていない）。先に掲げたジッド書簡に5カ月ぶりに応えたもので，「国立清華大学 / National Tsing Hua University / Peiping, China」とレターヘッドの入った用箋に近況が綴られている[39]——

《盛澄華のジッド宛書簡》

〔北京〕1948年5月21日

親愛なる先生

スイスから発信された47年12月23日付のお手紙をたしかに拝受いたしました。長らく便りを差し上げておりませんでしたが（というのも，あまり貴方を煩わせてはならぬと考えて），常々貴方のことを思っております。ご健康を完全に恢復なさり，パリにお戻りのことと存じます。離れておりますと不安も増すもので，一言でも頂戴できれば安心なのですが。私のほうは翻訳の仕事を続けております。『ユリアンの旅』はまもなく訳し終わります。また『架空会見記』は隔週の連載物として中国の大きな日刊紙に発表中です。

我々の大学で資格を取得し復習教師を務めている友人の林（リン）氏が，ソルボンヌで学ぶため（専門は心理学）数日後にはフランスに向かいますが，私はこのまたとない機会を利用して，貴方にささやかなお土産を託けます。それは北京特産の青銅製の印章で，貴方のお名前が彫られています。蔵書印として書物に捺すものです。これがその印です〔続いて徳紀と刻した朱印が捺されている〕。〔印章を収めた〕函のなかの小さな窪みには特別なインク（植物性の油を混ぜた朱色の印泥）が盛られています。使い方は印面全体にインクが行き渡るよう十分に浸した後，本やお望みの紙に力強く捺してください。

この手紙には家族と私の写真数葉も添えます。上手く撮れてはいませんが，他にはましなものが手元にないので，致し方なくこれをお送りする次第。敬具

盛澄華

すでに触れたが，『ユリアンの旅』中国語訳がどのようなかたちで出版されたかは不詳。また『架空会見記』の掲載紙についても未だ特定するに至っていない。第2段落冒頭に触れられる精華大学の復習教師「林」とは，おおよその年齢やその専門分野から見て，書簡8の「ジッドがシトレで会った林」とは別人物であろうが，これまた委細は不明である。いずれにかんしても今後の探索に委ねたい。

最終段落にあるように，書簡には盛澄華とその家族（妻と4人の男児）を撮っ

た小型のスナップ写真 7 葉が添えられている。写真はいかにも円満な家庭の様子を窺わせるもので，じっさい夫妻はその後もさらにもうひとり子を授かるが，どのような事情によるのか，1950 年代半ばに離婚するに至る。妻の韓恵連とも親しく接していた王辛笛はこの「理想的な伴侶」との離縁を嘆き，後には盛澄華を難詰することさえあったという[40]。離婚後，韓恵連はフランス語系の教授職を務めながら独力で子供たちを育てあげた。いっぽう盛澄華は 60 年代に再婚し，少なくとも一子をもうけている。

盛澄華はこの年の暮に森林出版社から公刊した『紀徳研究』をジッドに贈ったのだろうか。また出版にあたって書簡の中国語訳を載録する許可を前もって得ていたのだろうか。あるいはジッドが心からの詫びを綴った 1943 年 10 月の日記記述（1950 年初出）を目にする機会はあったのだろうか。そういった点をはじめ，同書出版前後から 51 年 2 月のジッド死去まで両者の文通関係が継続したのか否かについては，管見の及ぶかぎり如何なる確定的資料も見つかっていない。

王辛笛の息子・聖思は，盛澄華を追想した文章のなかで，ジッドを信奉して止まなかったこの知識人が奇妙なことに 1950 年代には「最も先頭に立ってジッドを否認する者となった」という作家・徐訏（シュシュ）の証言を引いている[41]。具体的な説明を欠いた寸評なので，筆者にはその正否を即断することはできないが，両次大戦間に「最重要の同時代人」（アンドレ・ルーヴェール）と称された大作家が，没後は時代遅れの烙印を押され，急速に「煉獄入り」した事実を思えば，ことに政治・社会体制の変貌著しい当時の中国にあってはさもありなんという気はする。関連資料の乏しさは否めぬものの，両者の関係については受容史的な観点から今後も調査・考察を継続していきたい。

註

1）François Cheng, *Le dit de Tianyi*, Paris : Albin Michel, 1998, p. 82. 引用にあたっては『ティエンイの物語』（辻由美訳），みすず書房，2011 年を参照したが，フランス語原文にもとづき若干の改変を施した。

2）*Ibid.*, p. 83. ただし彼の絶命時の様子について『ティエンイの物語』の記述には風説にもとづく潤色があるようで，追悼式に駆けつけた盛澄華の四男によれば――「父

は鯉魚洲農場に到着後，常に若者たちと一緒に働き，河を浚え湖を塞き止めて田畑をつくり，藁を敷いたテントで眠っていた。自分が心臓病を患っているとはまだ自覚しておらず，この度も午前中に湖のほとりで労働をし，昼過ぎに休息しに帰る途中で不調を感じたため，直接医務室に向かった。医師の話では，強心剤を打ったものの，父はさらに不調を訴え，30 分ほどで人事不省に陥り，そのため何の遺言も残すことはできなかった」（王聖思の回想記「父・辛笛とその親友・盛澄華」，後掲『盛澄華談紀徳』所収，271 頁が伝える証言）。

3）Voir Claude Martin - Akio Yoshii, *Bibliographie chronologique des livres consacrés à André Gide (1918-2008)*, Tupin-et-Semons : Centre d'Études Gidiennes, 2009, p. 27, item n° 131.

4）同著が稀覯書となっていることは，盛澄華の旧友・王辛笛の 1995–96 年時点での証言からも窺われる――「私は〔かつて〕国内で発表されたジッドの専門研究書として澄華の『紀徳研究』を推薦したことがある。拙宅に蔵していたものは残念ながら文革中に失われ，現在手元にはわずかに 1 冊が残るのみで，これは尭林図書館の整理・寄贈作業中に巴金先生から戴いたものである。私は常々これをいつの日にか重版刊行し，読者の要望に応えたいと思っている」（王辛笛「ジッドと盛澄華」，『盛澄華談紀徳』〔次註参照〕所収，245 頁）。

5）盛澄華『盛澄華談紀徳』，広西師範大学出版社（桂林），2012 年。

6）Voir Madame Yang Thang Lomine, *L'Attitude d'André Gide. Essai d'analyse psychologique*. Lyon : Impr. Bosc frères et Riou, 1930. この著書については拙稿「楊張若名『ジッドの態度』をめぐって」，『ステラ』第 17 号，九州大学フランス語フランス文学研究会，1998 年 6 月，247–250 頁を参照されたい。

7）知識人の多くが家財を押収され，私的文書や蔵書を失ったことは，先に引いた傅雷の例にあるとおり。盛澄華の場合については，再婚相手との間にもうけた娘（氏名不詳）による後年の証言がある――「父は文革中に多大な苦難に遭い，家族の書物は押収されたり燃やされてしまった。〔しかし〕私は，紅衛兵による家財差し押えの際，父が咄嗟の機転を働かせ，海辺に行き印章をひとつ刻したのを覚えている。曰く，「批判に供す」と。そして私たちふたりは，父の 4 つの書棚の本にこの印を捺しに帰った。残念ながら私はその時まだ幼く 5, 6 歳だったが，印を捺して回るのはことのほか楽しく感じられた。本の選択はもっぱら父がおこなったが，彼に代わって印を捺すのが私にはとても楽しかったのだ」（中国のインターネットサイト「百度百科」に掲載された盛澄華の項より）。ジッド書簡のオリジナルについても事情は同様で，王聖思によれば今日までその所在は不明である（前掲「父・辛笛とその親友・盛澄華」〔2011 年執筆〕，271 頁を参照）。

8）以下に提示する書簡の宛先・発信地や日付について一言しておくと，たとえば宛先が先行書簡と同一の場合，中国語訳では必ず「寄同前」と略記されている。また日付についても常に年月日が完全なかたちで示されているが，これはジッドの習慣からすれば，むしろ奇異な印象を与える（実際には «12 Oct. 47» のような表記がごく

頻繁におこなわれる)。翻訳者による「加工」は疑えず，またその加工も書状自体の記述に基づくのか，保存された封筒の住所・消印に依るのか判然としない。したがって本稿では，オリジナルの写真版が存在する書簡 14 をのぞき，宛先・発信地・日付のいずれについても〔 〕に入れて示す。

9）ただし各種の関連書誌・図書館蔵書目録にあたっても，この 3 作品の中国語訳が単行書として出版されたという情報は見当たらない。あるいは『架空会見記』(後出)のように新聞や文芸誌での掲載だったのだろうか。残念ながら現時点では委細は不詳とせざるをえない。

10）インターネットの関連サイトのなかには（たとえば上記「百度百科」)，盛澄華の忌日を「4 月 18 日」とするものがあるが，これは明らかな誤り。

11）1937 年 4 月 26 日付ロジェ・マルタン・デュ・ガール宛書簡。Voir André GIDE - Roger MARTIN DU GARD, *Correspondance (1913-1951)*, éd. Jean DELAY, Paris : Gallimard, 2 vol., 1968, t. II, p. 101.

12）Alessandro PELLEGRINI, « Una lettera di Gide », *L'Osservatore politico letterario* [Milan], juillet 1978, pp. 48-49.

13）ジッドはオランダの若い友人ジェフ・ラストに会いに行く予定であったが，結局この計画は取り止めになった。Voir André GIDE, *Correspondance avec Jef Last*, éd. G. J. GRESCHOFF, Lyon : Presses Universitaires de Lyon, 1985, p. 55.

14）その最も顕著な例は，牧師の日記の日付が 5 月 21 日の後，同月 12 日・14 日と続き，物語の時間の流れとは明らかに矛盾している点。Voir l'édition critique de *La Symphonie pastorale*, établie et présentée par Claude MARTIN, Paris : Lettres Modernes Minard, 1970, pp. LXXXV-XCIII.

15）小松清「ジイド会見記」,『中央公論』1939 年 1 月号，190-192 頁参照（同者著の『フランスより還る』，育成社，1941 年，91-94 頁；『創造の魔神――ジイドとの対話』，銀座出版社，1947 年，126-133 頁；『アンドレ・ジイド――自由なる射手』，河出書房，1951 年，204-210 頁がそれぞれほぼ同内容を再録)。

16）「5 月 4 日」という日付は，マリア・ヴァン・リセルベルグ『プチット・ダムの手記』の記述による。同日ジッドは，彼女をこの「ごく内輪での試写会」に同行させていたのである。Voir Maria VAN RYSSELBERGHE, *Les Cahiers de la Petite Dame*, Paris : Gallimard, coll. « Cahiers André Gide », 4 vol., 1973-77, t. III [1975], p. 136.

17）小松清「嵐の前に立って」,『中央公論』1940 年 8 月号，283-284 頁（同者著『沈黙の戦士――戦時巴里日記』，改造社，1940 年，179-180 頁に再録)。ちなみに映画には字幕は付されず，小松執筆の紹介文が映写に先立ち読み上げられた模様（この紹介文は翌年 4 月，ジャック・マドール，クララ・マルロー，ジョルジュ・デュヴォーによる映画評とともに『フランス＝ジャポン』誌〔第 49 号，348-351 頁〕に掲載される)。

18）「情けない音楽」あるいは「情けないお粗末な音楽」とは，松尾邦之助が伝えるジッ

ドの言葉（『巴里物語』，論争社，1960 年，296 頁〔社会評論社「2010 復刻版」，241 頁〕，および『自然発生的抵抗の論理――アンドレ・ジイドとの対話――』，永田書房，1969 年，93 頁）。現在視聴しうる東宝発売のビデオ版から推せば，これは音楽演奏の巧拙ではなく，録音の悪さ（割れるような劣悪な音質）に対する評だと思われる。なお，試写会はその後も「何度となく」おこなわれ，小松はそのうち，翌年４月 18 日のエドゥアール７世劇場での「来会者 400 名を超す一般公開試写会」と，５月 10 日のエリゼ・プロジェクションでの「『日仏文化』に特に縁故の深い寄稿家たちを招待した」試写会について証言を残している（上掲「嵐の前に立って」，283–284 頁参照）。またこれと並行して商業的上映の準備も進んでいたが，６月のドイツ軍パリ進攻ですべては水泡に帰してしまう。広く一般に公開されていれば，この日本版『田園交響楽』はいずれフランス版（ジャン・ドラノワ監督，ミシェル・モルガン，ピエール・ブランシャール主演。1946 年公開，第１回カンヌ国際映画祭大賞受賞）と並び論じられたはずなだけに，いかにも残念なことであった。

19）André Gide, *Journal II (1926-1950)*, éd. Martine Sagaert, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1997, pp. 970-971. この日記記述の初出は *Journal 1942-1949*, Paris : Gallimard, 1950, pp. 194-195.

20）ここでジッドが指すのはおそらく小松清のこと。彼はこの前年，イタリア・レポート「学生武道団の羅馬（ローマ）入り――駅頭意外な光景」（『報知新聞』，1938 年５月 28–29 日付朝刊）による筆禍が原因で報知新聞特派員の肩書きを失っていた（小松前掲書『創造の魔神』，87–102 頁，あるいは『自由なる射手』，156–167 頁を参照）。ただし松尾邦之助のことを指したという蓋然性も排除しきれまい。いずれにせよ「40 年来の知己」は明らかにジッドの誇張。実際には小松は 1931 年以来，松尾は 1927 年以来の知己であった。

21）建設社版『ジイド全集』月報「ラ・フゥルミ」第５号，1934 年７月，６頁（編集部通信欄），および松尾邦之助「ジイドとの一問一答」，同第６号，同年８月，１－３頁（微細な文言の修正を施したうえで，同年９月刊の『巴里素描』，岡倉書房，87–93 頁に再録。ただし稿末，面談の日付を「1936 年６月５日」と誤記）を参照。

22）松尾のジッド宛書簡は全集月報第８号（1934 年 10 月，１－４頁）に発表された。ジッドの返信も同号（６－７頁）に全文が訳出・掲載されたが，そのオリジナルは他のジッド書簡とともに第２次大戦中，松尾が滞在していたベルリンで焼失し（前掲『自然発生的抵抗の論理』，86 頁，および同者著・大澤正道編『無頼記者，戦後日本を撃つ――1945・巴里より「敵前上陸」』，社会評論社，2006 年，154 頁を参照），また日本語訳も全集月報以後は，筆者の承知するかぎり一度も再録されていないので，長くはなるがこの機会に全文を引用・紹介しておこう（引用にあたっては漢字・仮名を現代風に改め，また読点の若干数を削除した）――

プラハ，1934 年８月５日

マツオ・クニ様

君の７月 10 日付の手紙を拝見した。立派な，おそろしく賢い手紙であっただけ

に，返事をせずにいられなかったことを察してくれたまえ。

君はひょっとしたら――あれから大分経っているんで――僕が君の手紙を放擲(うっちゃっ)ておいたものと思ってやしなかったか……それが気になるが，実を言うと僕は仕事に追われ過労の結果すっかり病気して，カールスバート〔カルロヴィ・ヴァリ〕で静養を止むなくされ，やっと昨日医者の許可を得たという始末，だからその間，仕事は全然できなかった。

君の手紙を再読した。君は日本および日本の歴史，僕の昨今の態度にかんして書いている……君の書いたことはみな感激して読んだし，君の言うことは一々もっともだと思った。同時にまた，日本にたいしてとった西欧諸国の態度にかんする君の観察も正当であるように僕には思われた。

君の言う国際連盟にたいする言葉「連盟は，満腹した，盗みを思うぞんぶんやりつくした西欧資本主義国家の既得利権擁護機関だ」には，悲しいかな，賛成同意せざるをえない。のみならず，これに関連した君の堂々の意見にたいし，自分はそれを理解しうるばかりか，そこに深い同情の念を禁じえない。

特に君が自分に示されたる，マルローの証拠たるものを主張したもうな。貴国とソ連邦間の宿命的にして避けえられない戦争を，無理にも私に信じさせたものはマルロー自身であり，彼との会談であり，彼の確信なのである。かつ，この戦争をマルロー自身は近々のうちに行われねば止まぬのと信じている……然して，最も真面目に平和を口にする人たちの意向にも関わらず，方々ではそうした与論が行われているのである。……この戦争はおそらく，大きな社会的変動でもないかぎりは，何物といえどもこれを防ぎえぬような歴史的宿命なのだ。

もし私が君に直ちにこの返事をなしえたとしても，以上が，私の書きえたすべてなのである。

最近こうした暗雲が中欧を蔽って集積してきた。そうして，まずもって嵐が起こらなければならないのは，我が西欧の上にであると思われる。このような社会的なる苦難は，今日如何にも大きくあり，全世界的なものであり，ますますそれは大きくなって行って，それから先き我々は怖るべき日々を過ごさねばならぬのでもあろうと私は気づかう。けれど私の楽観主義は，そういったものの彼方を見つめようと努めている。然して，たとえ私のすべての理解にも関わらず，こういった苦難が起こってくるものであったとしても，私は君に心から手を差し延べる次第である。

アンドレ・ジッド

ちなみに松尾の後年の回想には記憶の錯誤・変質が少なくない。たとえば 1947 年刊の『ヂイド会見記』（岡倉書房）においては，序文執筆をめぐる遣り取りは「1932 年」のことと，またジッド書簡の発信地もプラハではなく「ブタペスト」と明記される（同書目次および 54 頁）。とりわけジッドの対応については，面談時からすでに否定的であった，と大きく変わる。曰く，「ヂイドは例の得意な脱走(エヴァジオン)を体よくやり，私は術なくヂイドに別れ諦めて帰った」（同，53 頁）。かかる論調の変質は以後

の著作でも同様に認められる（前掲の『巴里物語』，294 頁〔社会評論社「2010 復刻版」，239 頁〕，および『自然発生的抵抗の論理』，84 頁を参照）。

23）1938 年 11 月 24 日付および 1941 年 11 月 29 日付のアンリ・トマ宛ジッド書簡，個人蔵，未刊。いっぽうパリ大学附属ジャック・ドゥーセ文庫が現蔵するトマのジッド宛書簡群（整理番号 γ574）のなかには，後者の問い合わせにたいする返答をはじめ，盛澄華に言及したものは一通も見当たらない。

24）なお盛澄華への献本にかんしジッドがパリに問い合わせた手紙とは，プレイアッド叢書の創案者ジャック・シフリンに宛てた同年 11 月 21 日付のこと。その後，彼は 12 月 2 日にも同じ旨をシフリンに書き送り，さらに 14 日にはすでに発送済か否かを知らせよと求めている（voir André Gide - Jacques Schiffrin, *Correspondance (1922-1950)*, éd. Alban Cerisier, Paris : Gallimard, 2005, pp. 120, 123 et 127）。また『日記』出版の経緯等については，拙稿「ジッドとプレイアッド叢書――『日記』旧版をめぐって――」，『流域』第 49 号，青山社，2000 年 12 月，22–30 頁を参照されたい。

25）王辛笛「盛澄華とジッド」，『盛澄華談紀徳』所収，245 頁。

26）André Gide - Justin O'Brien, *Correspondance (1937-1951)*, éd. Jacqueline Morton, Lyon : Centre d'Études Gidiennes, 1979, p. 20.

27）中国語訳のレフェランスは順に――『地糧』（新生図書文具公司，1943 年），『偽幣製造者』（文化生活出版社，1945 年），『日尼薇』（同，1946 年）。

28）ジッドの唯一の実子カトリーヌは 1946 年 8 月から 50 年代半ばまで作家のジャン・ランベールと婚姻関係にあり，その間（かん），彼との間に 4 人の子をもうけた。ここで誕生間近とされているのは，長女イザベルに次ぐ第 2 子ニコラ（1947 年 10 月 16 日出生の長男）のこと。

29）ジッドが言及しているのは次の 2 つの版―― André Gide, *Attendu que…*, Alger : Charlot, 1943 ; *Interviews imaginaires*, Paris : Gallimard, 1943. これらの他にも同著にはスイス版，アメリカ版（ともに 1943 年刊），マダガスカル版（1944 年）など数種のフランス語刊本がある。

30）André Gide, *Souvenirs littéraires et problèmes actuels*, Beyrouth : Les Lettres Françaises, 1946. なおジッドの講演テクストは引き続き『ラルシュ』誌同年 8－9 月号に掲載され，また 1949 年にはジッドの評論集『秋の断想』（メルキュール・ド・フランス刊）に収録される。

31）最初に公刊された英語訳は 1950 年のエルシー・ペル訳。Voir André Gide, *Autumn Leaves*, trad. par Elsie Pell, New York : Philosophical Library, 1950 [le texte de *Literary Memories and Present-day Problems* aux pp. 191-215].

32）André Gide, *Allocution prononcée à Pertisau le 18 août 1946*, s. l. : Imprimerie nationale de France en Autriche, [1946].

33）刊本は 2 カ月後ガリマールから出来（11 月 30 日刷了）。

34）前註 28 を参照。

35）この点については特にエイドの次の証言を参照―― Richard HEYD, « André Gide dramaturge », *Revue de Belles-Lettres*, vol. LXXVII, n° 6, novembre-décembre 1952［parution mars 1953］, pp. 9-12.

36）このテクストは式典の翌日『フィガロ』紙に掲載された。その後マルタン・デュ・ガールとの往復書簡集の補遺にも載録されている（vor leur *Correspondance*, *op. cit.*, t. II, pp. 555-556）。

37）この論文は前掲『盛澄華談紀徳』，200–220 頁に再録されている。

38）この単語が現れるのは『ユリアンの旅』「悲愴洋」第 7 章中の次の一節――「洞窟の奥には，砂が渚のようになっていて，そこにさざ波が寄せてはぴたぴた音を立てていた。私たちは，こうした海底の妖夢のなかを泳いでみたいと思った。だが，蟹やシャルトルイユのことを思うと，泳ぐ気にもなれなかった」（山内義雄訳）。ちなみにその当否はさておき，『ユリアンの旅』の校訂版を作成したジャン＝ミシェル・ヴィットマンは当該語について次のように注記している――「ヤツメウナギの淡水棲幼生を指す動物学用語 « chatouille » との（意図的な？）混同」（André GIDE, *Le Voyage d'Urien*, éd. critique présentée par Jean-Michel WITTMANN, Tupin-et-Semons : Centre d'Études Gidiennes, 2001, p. 81, n. 1（note reproduite in André GIDE, *Romans et récit. Œuvres lyriques et dramatiques*, 2 vol., Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2009, t. I, p. 1282, n. 27）。

39）ジャック・ドゥーセ文庫，整理番号 γ 422.1，未刊。

40）王聖思の前掲回想記，268 頁参照。

41）同上，258 頁参照。この引用の出所は示されていないが，徐訏は北京大学哲学系の出身で，パリ留学中に盛澄華と親しく交わった人物。

〔付記〕盛澄華宛ジッド書簡の日本語重訳にあたっては，九州大学大学院人文科学研究院専門研究員（中国文学講座）・長谷川真史氏のご助力・ご教示をえた。ここに記して同氏への深甚なる謝意を表する。

《関連資料》ジッドとポール・アルシャンボーの往復書簡

「書簡 11」の関連資料として，『アンドレ・ジッドの人間性』（*Humanité d'André Gide. Essai de biographie et de critique psychologique*, Paris : Bloud & Gay, coll. « La Nouvelle Journée », 1946）をめぐり著者アルシャンボー（1883–1950）とジッドとが交わした未刊書簡 2 通を以下にフランス語原文で掲げる（ジャック・ドゥーセ文庫，整理番号 γ 51.2-3. 若干数の変則的な句読法については改変はせず，原資料どおりに転写・再現する）。ジッドはかなり早期から，自らが重要と判断した書簡の写し，あるいは下書きを保存する習慣を身につけていた。特に私設秘書（イヴォンヌ・ダヴェ，次いでベアトリクス・ベック）を雇った 1946 年 4 月以降は，タイプをさせるさいにカーボンコピーを取ることが多くなる。以下の 2 通についても，ジッド書簡はカーボンコピー（その正本に自筆署名を入れて名宛人に送付），アルシャンボーの返信はタイプ打ちの写しである。なお，両書簡が触れる「ラカーズ青年の詩集」とは，ジッドの書簡が巻頭を飾ることになるジャン・ラカーズの遺作『出立の歌』（Jean LACAZE, *Chants de départ*, Finhan : Éd. Chantal, 1947）のこと。また「ベイルートでの講演」は言うまでもなく前出の『文学的回想と現今の諸問題』を指す。さらに付言すれば，ジッド書簡には先行往復書簡への言及があるが，その 2 通はいずれも今日まで所在が確認されていない。

* * *

André Gide à Paul Archambault

M. André Gide
I bis, rue Vaneau
Paris – 7e

Paris, le 25 septembre 1946

Cher Monsieur,

Que votre livre m'ait occupé le cœur et l'esprit ces derniers dix jours, voici qui n'a rien d'étonnant. Je n'avais pas attendu de le recevoir de vous (hier matin) pour le lire — ou le relire, car vous m'en aviez aimablement communiqué certains chapitres, au sujet de quoi je vous avais écrit déjà.

Il me souvient que, dans ma lettre, en post-scriptum, et après m'être chaleureusement étendu sur le réconfort puisé dans votre sagesse et compréhensive sympathie, je m'élevais assez véhémentement contre certaines interprétations de mon *Numquid et tu…?* où, d'après vous, j'aurais cherché dans les paroles du Christ une justification et même une approbation des actes de ma vie les plus condamnables (chrétiennement parlant) et que je tenais pour les plus répréhensibles et sentais, en ce temps, propres à m'écarter de la lumière divine. Il y avait là confusion certaine, tout au moins chronologique ; et je protestais que si j'avais, par la suite, pu (ou cherché à) me dégager de la morale chrétienne, jamais, au grand jamais, je n'avais tenté de chercher dans le christianisme, par complaisance, une excuse de

mes écarts… Je n'ai plus votre premier texte, ne puis donc le comparer avec celui-ci. Y avez-vous, à la suite de ma lettre, peut-être, apporté quelques retouches ? Sans doute ; car relisant aujourd'hui ce chapitre XIII, je n'y ai plus du tout retrouvé motif à sursaut.

Votre lettre, de part en part et d'un bout à l'autre respire une bonne foi parfaite, une honnêteté qui m'émeut plus que je ne puis dire ; et l'on ne saurait pousser plus loin, alors même que vous me critiquez, désapprouvez ou condamnez, un désir de compréhension et de sympathie des plus rares, dont je vous suis profondément reconnaissant.

Et déjà me plaît le titre de votre ouvrage — qui met en avant le terrain d'entente et ce par quoi nous pouvons communier, en dépit de toutes les divergences. J'ajoute aussitôt que le livre est… *entraînant*. J'oubliais, le lissant, que c'était de moi qu'il s'agissait : un débat s'engageait, que, de chapitre en chapitre, l'on suit, une sorte de drame intime dont l'intérêt se poursuit sans relâche, — jusqu'aux avant-derniers chapitres du moins, où la ratiocination l'emporte et où je cesse un peu de vous accompagner dans ces distinctions que vous vous efforcez d'établir entre bonheur et joie et plaisir. Il va sans dire que je m'élève contre l'assertion (c'était déjà celle de Ch[*arles*] Du Bos ; c'est encore celle de Mauriac) : la perte de la *foi* entraîne nécessairement une *déspiritualisation*. Eh ! parbleu vous êtes tenu de le penser ; mais cela n'est que trop aisé à prouver dès l'instant que vous ne voyez de spiritualité que dans la foi. Il y a là un cercle vicieux, dont on ne peut sortir. Tout est prouvé d'avance ; rien n'est prouvé. Maints exemples se dressent à l'encontre.

J'accepte de n'avoir pas donné cette grande œuvre « déchirante » (le mot est excellent) et définitive et dominante que vous étiez, dîtes-vous, en droit d'attendre de moi. Je n'aurais pas satisfait aux promesses, aux espoirs que j'aurais fait naître… Il se peut. Ce n'est pas à moi d'en juger. Mais vous semblez croire, vous invitez à penser, que, cette œuvre suprême, la foi, le consentement et l'abandon aux vérités chrétiennes, m'aurait permis de l'écrire, m'aurait irrésistiblement poussé à l'écrire. Alors je ne puis me retenir de songer au nombre d'artistes, que tous deux nous avons connus, Jammes, Ghéon, Maurice Denis (entre tant d'autres) dont la foi a, tout au contraire, lamentablement arrêté l'essor, et qui n'ont plus rien peint, ou écrit, qui vaille, dès qu'ils se sont reposés dans cette assurance que la Foi les dispensait de toute recherche, de tout effort. Vous connaissez l'enfantin raisonnement de Jammes : autant le christianisme est supérieur au paganisme, autant mes Géorgiques, parce que chrétiennes, l'emportent sur celles de Virgile. Ne croyez pas que je tire argument de cette naïve boutade (encore que Jammes fût très convaincu !) Mais tout de même j'admire à quel point le point de vue chrétien incline souvent la balance du critique et fait, par exemple, André Rousseaux s'extasier sur certains vers de Péguy qui n'ont d'autre qualité que de « consentement mutuel » — et qui, s'ils n'étaient pas d'émanation chrétienne, ne seraient jugés dignes d'aucune considération. De même que pour le patriotisme, certain chauvinisme de la foi vient tout fausser. C'est ne plus être injuste, semble-t-il, que de l'être pour le bon motif. Dieu merci ! Vous ne donnez pas dans ce travers — vous vous retenez d'y donner.

Il est aisé de s'épanouir, de laisser s'étaler ses dons, dans et selon des *vérités* fournies par la tradition et adoptées. Celui qui cherche et n'admet rien de reconnu d'avance se trouve extraordinairement handicapé ; c'est un grand risque, qu'il accepte. Je crois pourtant, j'espère que, après bien des tâtonnements, des hésitations, des retours, mes derniers écrits s'affermissent dans une sorte de certitude qu'il ne sera pas malaisé, plus tard, de dégager. Il ne m'appartient pas d'en juger, ni même de prétendre que mes écrits, par leur qualité (que vous savez si bien, et avec tant de sympathie humaine, reconnaître) mériteront d'occuper l'attention de ceux qui nous succèderont sur cette triste terre.

Me laisse perplexe certaine affirmation de vous, éparse au cours de votre livre, mais spécifiquement formulée p. 150 : « Du service du prochain au service de Dieu… la pente est naturelle. » Affirmation qui me paraît bien hasardeuse, bien peu prouvée… Permettez-moi de n'en rien croire.

Je me résume : étant donné que, du point de vue chrétien, vous ne pouvez que condamner (ce que je n'ose appeler) mon éthique et mon influence [1], je vous sais gré, de tout cœur, d'avoir, et de tout cœur, reconnu, protégé, généreusement sauvegardé l'humanité de mon apport — et vous en reste profondément reconnaissant. Sans doute après vous être si longuement occupé de moi devez-vous vous sentir désireux de porter votre attention ailleurs (ainsi qu'il m'advint à l'égard de Dostoïevsky à la suite de mes conférences sur lui). Je souhaite pourtant que vous preniez connaissance de ma conférence à Beyrouth, parue dans le dernier N° de *L'Arche*, que je vous fais envoyer ; et aussi de cette courte préface que j'écrivis en juin dernier, répondant aux supplications réitérées d'un père dont le fils venait de se sacrifier dans la Résistance. Le volume de vers du jeune Lacaze, si tant est qu'il soit mis dans le commerce, restera, je pense, et la préface qui l'accompagne, peu répandu, peu remarqué ; et du reste je n'écrivis cette préface que protégé contre toute publicité indiscrète. Je ne saurais mieux vous marquer ma confiance qu'en vous communiquant ce texte quasi secret (inutile de me le renvoyer). D'autres textes, par la suite, pourront éclairer davantage ce que déjà vous avez su entrevoir dans mes écrits.

Que je ne cherche pas la louange, vous m'avez assez bien lu pour le savoir et que ce ne sont point elles qui me touchent surtout dans votre étude ; mais bien cette totale bonne foi, cette *humanité* par quoi je me sens si proche de vous, en dépit de nos divergences — et qui me laisse penser que, si j'avais le plaisir (non : la joie) de vous rencontrer un jour, nous pourrions converser sans contrainte : avec un affectueux abandon, de ma part.

Veuillez croire, Monsieur, à ma confiance très attentive.

[*André Gide.*]

---

(1) J'ai déjà cité, et vous l'avez retrouvé dans mon *Journal*, le mot péremptoire de Bossuet : « Il est impossible qu'il enseigne bien, puisqu'il n'enseigne pas dans l'Église. » (Sermon du 14 février 1660).

Paul Archambault à André Gide

45, rue Perronet
Neuilly (Seine)
2 / 10 / [*19*]46

Cher Monsieur,

Un voyage en Autriche auprès d'un de mes fils, les fiançailles de ma fille ensuite, m'ont empêché de répondre plus tôt à votre lettre. Mais vous ne doutez pas qu'elle m'ait profondément ému et touché.

Comme auteur, je suis flatté que vous ayez trouvé mon livre « entraînant »… Figurez-vous que c'est l'impression que j'osais avoir en l'écrivant.

Comme homme, je suis encore plus heureux qu'elle ait si rapidement établi le contact entre moi et un grand esprit que chaque nouvelle heure de réflexion et de lecture me faisait aimer davantage.

J'ose dire que vous vous méprenez lorsque vous attribuez à une préoccupation spécifiquement religieuse cette impression de « déspiritualisation » que j'avoue finalement. — Ce qui me manque, c'est simplement : un total engagement.

Je ne crois pas, par ailleurs, vous avoir jamais soupçonné de chercher dans l'Évangile — artificieusement et consciemment — une excuse à ce que l'Évangile me paraît condamner de la manière la plus formelle.

Sur ce point nous ne nous comprenons point parfaitement.

Mais, sur le reste, quelle large zone de sympathie ! Et combien je vous remercie de m'avoir communiqué ces textes (Lacaze et la Conférence de Radio-Liban) qui me semblent me justifier pleinement sur un point où des amis entretenaient mon inquiétude : prendre *tout à fait* au sérieux un homme et une œuvre qui me paraissent le mériter tout à fait.

Vous voulez bien me proposer un entretien… d'une manière générale, lundi excepté, je pourrai aller vous joindre, en fin d'après-midi, le jour que vous me feriez indiquer (Tél. : Maillot 40-55).

Permettez-moi de vous assurer, cher Monsieur, de la plus profonde et respectueuse sympathie « humaine ».

P[*aul*] Archambault.